

笠置寺の解脱鐘

笠置寺の釣鐘は中国形式で、1196年に鑄造され、国の重要文化財に指定されています。底の部分に六ヶ所の切り込みがある釣鐘は、日本ではここだけです。この釣鐘は、高僧重源によって造られ贈呈されたもので、この時期笠置寺に住し、活動していた学僧貞慶(1155–1213)との関わりがあったことが認められています。

寺伝によれば、貞慶が笠置寺に住している時、突然土が盛り上がり、貞慶の前に冥界の閻魔大王の使いが現れました。閻魔大王は、貞慶が優れた人物であることを聞き、仏教の教祖である釈迦如来についての話を聞くために使いを送りました。貞慶は、承諾し、閻魔大王に釈迦如来の話をしました。閻魔大王は、貞慶の話に感銘を受け、褒美に砂金を渡しました。この砂金が、笠置寺の釣鐘の材料に使われたと伝えられています。